小樽青色申告会連合会　会長賞

小樽市立菁園中学校　1年
鈴木　悠真

税について

私たちは毎日、当たり前のように生活していますが、その当たり前を支えているのが「税金」です。中学生である私にとって、一番身近な税金は買い物をするときに支払う消費税です。お菓子や文房具を買うたびに、手持ちのお金が少し多めに減っていくため、以前の私は「なぜ税金なんて払わなきゃいけないのだろう」「損をしているのではないか」と否定的な感情を抱いていました。しかし、税金について詳しく調べているうちに、その考えは大きな間違いであることに気付かされました。

　実は、私たち学生は税金を払うだけでなく、それ以上の恩恵をすでに受けています。例えば、学校で毎日使っている教科書には「無償給与」と書かれています。この教科書代は、すべて国のみんなが納めた税金で賄われています。それだけではありません。学校の校舎や、机、冷暖房設備、そして先生方の給料も税金から出ています。もし税金がなかったら、私たちは莫大な授業料や教科書代を自己負担しなければならず、経済的な理由で学校に通えなくなる人がたくさんでてしまうでしょう。教育を受ける権利が平等に守られているのは、税金のおかげなのです。

　さらに視点を広げると、街の中にも税金があふれています。私たちが安全に歩ける歩道、夜空を照らす街灯、火事のときに駆けつけてくれる消防車、治安を守る警察の活動、これらはすべて税金によって運営されています。もし事件や事故に巻き込まれたとき、警察を呼ぶのにお金がかかったら、安心して暮らすことはできません。医療費の負担が一部で済むのも、ゴミを回収してもらえるのも、すべて税金による社会の支え合いがあるからです。

　このように考えると、税金は国に「取られているもの」ではなく、私たちが安全で豊かな生活を送るために「みんなで出し合っている会費のようなものだと言えます。一人ひとりの力は小さくても、みんなで集めて必要なところに分け合うことで、社会全体の安心が

作られています。

　今、日本は少子高齢化が進み、お年寄りの医療や介護を支えるための社会保障費が膨らんでいます。これからの未来を生きる私たちは、税金への関心をさらに高め、それが正しく使われているかを見守る責任があります。

　「損をしている」と感じていた消費税も、今では自分がこの社会を支える一員であるという「参加費」のように感じられるようになりました。私も将来、社会に出てしっかりと働き、納税の義務を果たすことで、次の世代が安心して暮らせる社会を繋いでいく一人になりたいと思います。